

第3章 伊那市の歴史文化の特性

市内にある様々な歴史文化資源は、伊那市ならではの環境が生み出したものです。2つのアルプスや天竜川水系の河川、古くからの道などとの関わりの上に育まれ、伊那市らしさを生み出していることがわかります。



1 歴史文化資源の分布状況



市内のどのような所に歴史文化資源があるのでしょうか。古くからよく使われた道沿いや、大きな道が交わる場所にたくさんの歴史文化資源が集中しています。

伊那市の歴史文化資源の分布状況を見ると、^{たかとおまち}高遠町地域の中心部である西高遠や東高遠や伊那市街地付近に特に集中しています。その理由として、それぞれ街道が交わる場所に位置していることが関係しています。高遠市街地は高遠城と城下町を含むエリアで、^{つえつきかいどう}杖突街道(金沢街道)と^{あきはかいどう}秋葉街道が交わる場所、伊那市街地は伊那街道と^{ごんべえかいどう}権兵衛街道が交わる場所で、様々な人や文化が入りやすかったことが要因です。

また、高遠町地域では杖突街道沿いに多く歴史文化資源が分布しており、^{はせ}長谷地域では秋葉街道沿いに多く分布しています。これは、両地域とも平地が少ないという地形的な要因のほかに、街道を通して様々な人や文化が入ることにより、街道沿いが栄えていったためと考えられます。

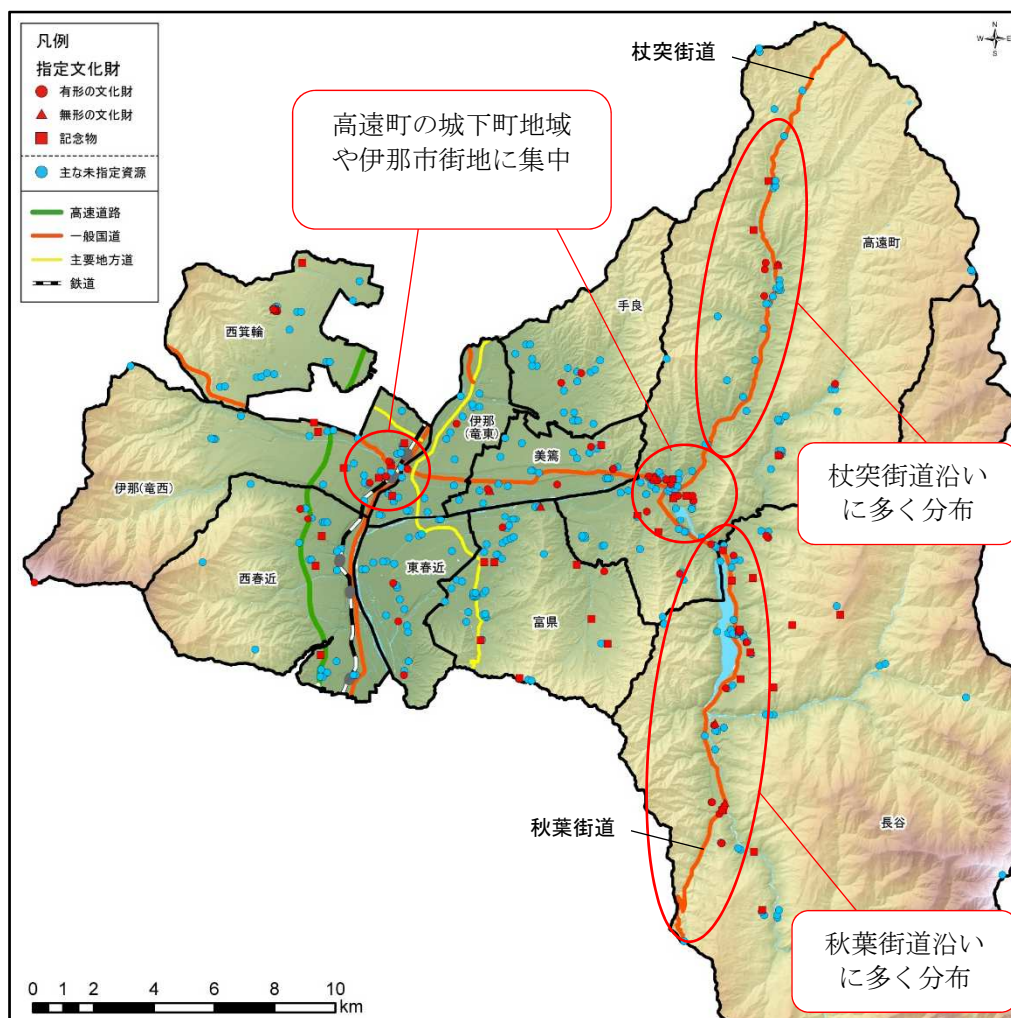


図. 歴史文化資源の位置

2 地域別の歴史文化の特性



かつて町や村だった市内 10 の地域には、その土地の歴史から生まれた文化や資源が遺っています。それぞれの地域にどんな特徴があるのかまとめてみました。

(1) 伊那(竜西)地域

東に天竜川、西は西部山麓から中央アルプス山岳地域までを含む伊那(竜西)地域には、小沢川と小黒川が流れ、自然豊かな地域と交通の発展とともに栄えた市街地エリアがあります。

天竜川西の段丘上から西部山麓までは広大な台地が広がっており、かつて水が乏しかったこの地域では、長い間水をめぐる争いが絶えず、人々は年月をかけ、苦心して水田を拓いてきました。小沢川を中心に発達した井筋や横井戸を利用した艶三郎の井、西天竜幹線水路など、用水に関わる歴史文化資源が複数見られます。

段丘の東上端には戦国時代の城、春日城跡があり、その直下には古くからの街道である伊那街道が通っています。塩尻宿(現在の塩尻市)と飯田城下(現在の飯田市)のほぼ中間に位置する伊那部宿は、木曾へ通じる権兵衛街道や高遠へ向かう杖突街道(金沢街道)の分岐にも近く、江戸時代には非常に賑わった宿場でした。宿場の最南端には、当時の趣を今に伝える伊那部宿酒屋旧井澤家住宅も遺されています。

明治時代になると伊那街道の改修が行われ、当時物流の中継地として隆盛を極めていた天竜川通船の舟着き場や、明治 45 年(1912 年)に開業した伊那電気鉄道の駅を取り込む形で近代の市街地が形成されていきました。建ち並ぶ看板建築の町並みは、昭和 20 年代から 30 年代の最盛期の街の繁栄ぶりを今に伝えています。

昭和 5 年(1930 年)に開館した上伊那図書館は、上伊那に遺る最も古い鉄筋コンクリート建造物で、外壁には高遠焼のテラコッタが使われるなど、当時「壮麗完備天下に誇る」と言われ、多くの人に親しまれてきました。

このように伊那(竜西)地域は交通や地域の近代化に関わる歴史文化資源が多く遺る地域です。



【伊那(竜西)地域の主な歴史文化資源】



つきみまついせき
月見松遺跡
(市指定文化財)

小沢川の左岸段丘上にある縄文時代中期の大規模な遺跡です。ユニークな造形の顔面把手付大深鉢をはじめ、独特な文様や形の土器が多数出土しています。



やまでら はくさんしやはちまんしゃ
山寺の白山社八幡社
合殿のケヤキ
(市指定文化財)

樹齢 800 年とも言われる御神木で、高さ 22m、目通りの幹周が 9.8m の大木です。幹には大きなこぶがたくさんあり、風格を感じさせます。



じょうえん じ
常 円 寺

600 年の歴史を持つ古刹で、戦国時代の織田軍による高遠城攻めの際に寺に寄進された「雲板」や明治時代から大正時代に活躍した日本画家の小坂芝田の描いた「十六羅漢図」、「青緑楼閣山水画」といった市指定文化財があります。



てんりゅうがわふなつき ば
天 竜 川 舟 着 場

天竜川通船は、江戸時代の文政年間から明治 30 年代まで約 80 年間にわたって行われました。廻船問屋が並び、舟着場のあった「入舟」という町名に通船の名残を留めています。



やまでら おど しゅうぞく
山寺のやきもち踊りの習俗(県選択無形文化財)

山寺の白山社八幡社合殿で、毎年 4 月に行われます。当屋祭、当屋引継式に続き行われる踊りでは、4 人の唄い手を中心に踊り手が円を組み、酒盛りを挟みながら 3 回踊ります。3 回目の踊りの後は、先を争って一目散に境内から逃げます。



きゅうかみ い な と しょかん
旧 上 伊 那 図 書 館 (市指定文化財)

昭和 5 年(1930 年)に開館した上伊那図書館(現在の伊那市創造館)は、製糸業で財を成した実業家の武井寛太郎の寄付によって建設された建物で、地域の教育や文化を支えた場所です。



※赤印の指定文化財、青印の未指定の資源は明確な場所が特定されていない場合があります。

図. 伊那(竜西)地域の主な歴史文化資源の位置

(2)伊那(竜東)地域

伊那(竜東)地域は2つの河川に挟まれた地域で、西に天竜川、南に三峰川が流れており、河川に関わる歴史文化資源が多くあります。

霞堤や柵立堤防といった治水施設の跡や、水害が起こらないように祈りをささげたと伝わる般若島、洪水に見舞われた土地を復旧するための測量基準となった見通し桜などが遺るほか、無形の資源としては、天竜川の氾濫に直面した人々の姿を詠んだ狂歌や、被災地を共有地にして復旧を分担する「割地」という制度も伝わっています。

天竜川と三峰川が形づくる河岸段丘の上には、各時代様々な遺跡があります。天竜川や周辺地域を見下ろすことができる上牧や福島段丘端部には古墳群が見られるほか、上の原の広い平坦面を利用した旧陸軍伊那飛行場跡地といった戦争遺跡もあります。

近年は(都)環状南線や(主)伊那生田飯田線、(主)伊那辰野停車場線といった主要道路が整備されたこともあり、商業施設や工業団地が増え、新たな住宅地も増えています。一般国道153号伊那バイパスの延伸に併せて、埋蔵文化財の発掘調査が行われた地域でもあります。近年は野底の荒神遺跡から新たに弥生時代前期の稲作の伝播を示す土器も見つかっており、今後さらに伊那市の歴史が明らかになる可能性を秘めた地域です。

※道路路線名の前にある「(都)」は都市計画道路、「(主)」は主要地方道を意味します。



【伊那(竜東)地域の主な歴史文化資源】



のそこ さくだていぼう
野底の柵立堤防

江戸時代中期、高遠藩の郡代、阪本天山がこの地に堤防を築きました。特殊な工法で大型の柵のようであったことから柵立堤防と呼ばれました。



みとお さくら
見通し桜

狐島の天竜川沿いにあり、江戸時代から測量の基点になっていた桜です。延享元年(1744年)の大洪水をきっかけに、狐島村と荒井村では村の境界を明確にした絵図を作りました。その後、何度も洪水に見舞われましたが、その都度、見通し桜など、絵図に書かれた基点を元に境界復元が行われました。



しんめいしゃこうじんしゃごうでん

神明社荒神社合殿のケヤキ(市指定文化財)

神明社荒神社の境内には、樹齢 300 年と言われるケヤキが 7 本あります。直線的に配置された樹々は、時には風除けとなり、天竜川が氾濫した際には、荒れ狂う水を防いだと伝えられています。



もくぞうあみだによらいざろう

木造阿弥陀如来坐像(市指定文化財)

阿弥陀寺の本尊で、室町時代前期の作とされます。高さ 112 cm の檜材一本造りで、木彫の上に布を貼り、漆を施してあります。地方での当時の仏像様式を知る上で、貴重な像です。



あらがみ いせき

荒神遺跡

野底にある荒神遺跡は、縄文時代、弥生時代、平安時代といった複数の時代にまたがる複合遺跡です。国道 153 号伊那バイパス建設地であったため、工事前に発掘調査を行い、遺跡の記録を残しています。



れんだいば

蓮台場

戦国時代、武田信玄が伊那へ侵攻してきた際に、最後まで抵抗した 8 人の地侍が、捕らえられ処刑された場所だと伝わります。遺体(首)は、長谷黒河内に葬られ、八人塚として祀られています。



図. 伊那(竜東)地域の主な歴史文化資源の位置

(3) 富県地域

高鳥谷山の山麓にあり、北に三峰川が流れる富県地域には、縄文時代早期の土器が出土した三ツ木遺跡や縄文時代中期後葉の顔面付釣手形土器が出土した御殿場遺跡、馬の生産に関わった人々が築いた福地の古墳群などの遺跡があり、古くから連綿と人々の生活が営まれてきた地域です。

高鳥谷山麓に生育する高鳥谷のマツハダや久保田のアカマツ、信仰の場に生育する上新山宮下のサワラ、薬師堂のシダレザクラなど、他地域と比較して市の天然記念物に指定された樹木が多くあります。

この地域の特徴は、狭い範囲に中世の城館跡が数多く遺ることです。高遠城の戦いの際に織田信忠軍が陣を置いたと伝わる「一夜の城」をはじめ、桜井地区や貝沼地区には多くの城館跡がありますが、一夜の城の発掘調査では、深い堀に囲まれた城館跡の様子が明らかになっています。これらの城の多くは、中世に有力百姓が居住していた場所だとされ、彼らが江戸時代の豪農層に変化していったとみられています。このように遺跡を通して社会の変化をうかがい知ることができる地域です。

富県地域は段丘上であることから、古くから水利が問題となる地域でもありました。戦国時代の高遠城主、武田勝頼が富県の在地領主に発給した文書の中にも、井筋の管理に関わる記述が見られます。江戸時代後期、伊東伝兵衛が伝兵衛井筋(鞆ヶ鼻井筋)を完成させてからは、富県地域や下流の東春近地域には豊かな農地が広がるようになり、現在もこの用水が地域の農業を支えています。



【富県地域の主な歴史文化資源】



やくしどう
薬師堂のシダレザクラ(市指定文化財)

中新山今泉の薬師堂には、樹高 12m、幹周 5.5mのシダレザクラがあり、樹齢は 200 年を超えと言われています。樹肌はコブ状になっており、太枝が枯れてしまっているところもありますが、春には、見事に花を咲かせます。



たかずや
高鳥谷のマツハダ(市指定文化財)

常緑針葉樹のマツハダは、東北南部から中部地方に分布する希少種です。伊那市内では、南アルプス山麓に生育していますが、高鳥谷山のような里山に見られるのは珍しく、幹周 1 m、樹高 30mで樹勢もよく、美しい樹形をしています。



いちや じょう
一夜の城

高遠城の戦いの際に、織田信忠軍が一夜にして築き、陣城としたという伝承が伝わる城です。現在も高さ 50 cm～3 m の土塁が、一辺約 50m の正方形の城を取り囲んでいます。



たけだ かつよりはんもつ
武田勝頼判物

高遠城主になった武田勝頼が在地領主の埋橋氏に対して発給した文書で、井筋の管理を命じています。



みやの はなはちまんじんしゃ
宮ノ花八幡神社の社叢



みやの はなはちまんじんしゃほんでん
宮ノ花八幡神社本殿(市指定文化財)

創建年代は不明ですが、スギやヒノキなど 300 本もの樹木が社叢を形成しており、古いたずまいをもつ神社です。拝殿建物の奥にある、江戸時代前期(1670～1680 年頃)建築の本殿が、市の有形文化財に指定されています。



かたくらてんぱくしゃ さくらいてんぱくしゃ
片倉天伯社(桜井天伯社)

洪水で流された藤沢郷片倉の天伯社が、この地に一時漂着したことから、分神して祀られた神社です。水の神、瀬織津姫命を祭神としており、美簀川手の天伯社とともに、サンヨリヨリが行われます。

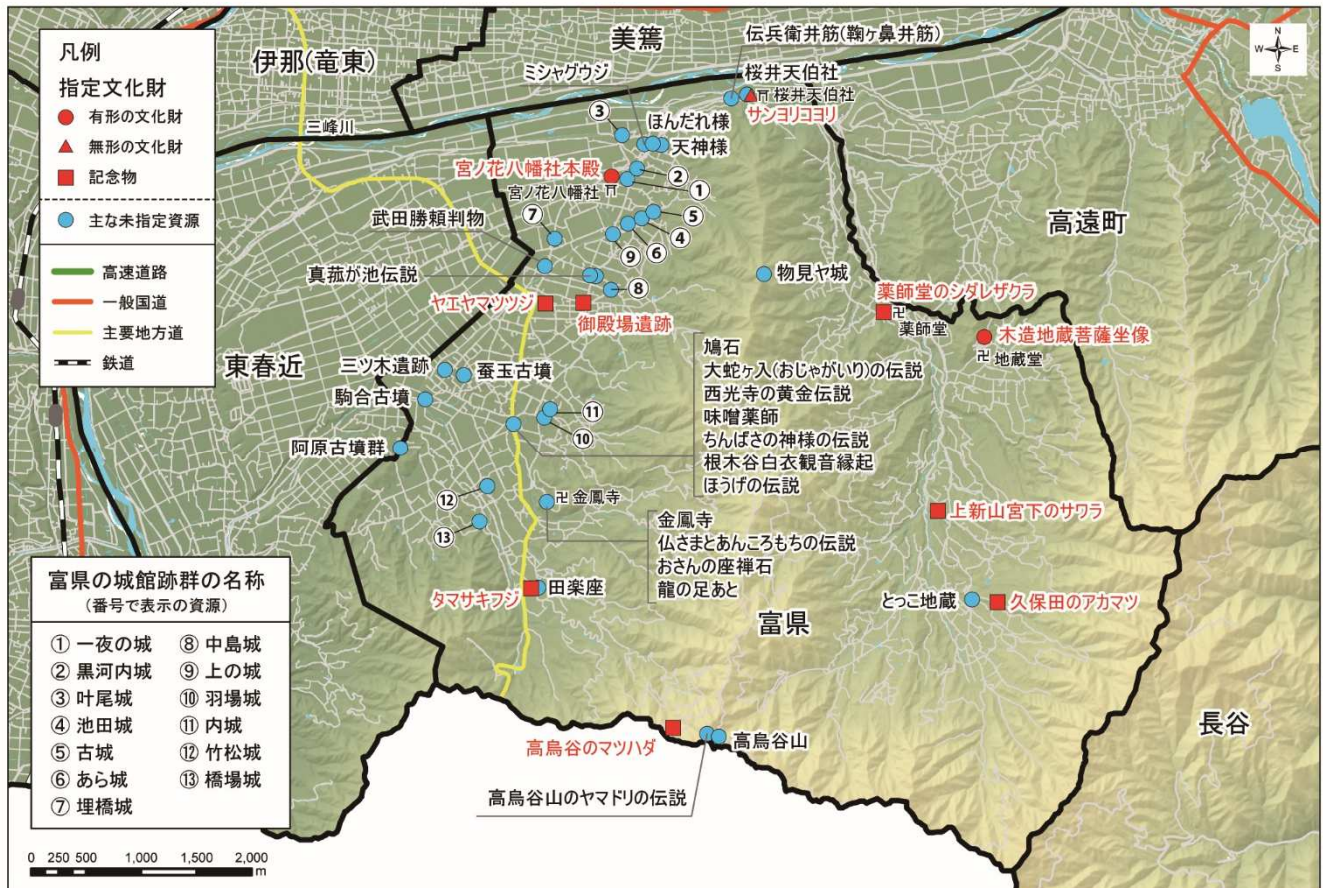


図. 富島地域の主な歴史文化資源の位置

(4) 美簗^{みすす}地域

美簗地域には、古くから高遠城下と伊那を結ぶ杖突街道(金沢街道)が通っており、人の往来が盛んな地域でした。

南に三峰川が流れ、川と接する範囲が広いことから度々洪水に見舞われてきた地域でもあります。「サンヨリコヨリ」など洪水伝承と深く関わる無形の民俗文化財が伝わるほか、伊那(竜東)地域と同様、治水施設である霞堤が随所に見られ、「割地」の風習も伝わっています。

段丘^{だんきゅうが}によって分けられた地域は、それぞれ異なる趣を見せており、段丘の最上段に広がる六道原^{ろくどうはら}は、三峰川と接する下段とは異なり、水利に恵まれない地域でした。平安時代には広大な平坦地^{へいたんち}を利用し、笠原^{かさはら}に朝廷へ献上するための馬を飼育する御牧^{みまき}があったと伝えられます。現在のように水田が拓けたのは、江戸時代後期に高遠藩直営工事で六道の堤^{ろくどうつつみ}が造られ、水が得られるようになった後のことです。

江戸時代に始まり、地域の生活を支えた笠原紙^{かさはらがみ}や簗竹細工^{すずたけざいく}といった産業も、現在ではほとんど見られなくなりましたが、住民主体で運営されている美簗小学校資料館には、当時の道具が保存展示され、地域の方々の手によって子ども達に伝えられています。景観保全も含めて、地域ぐるみで歴史文化を伝承している地域です。



【美簗地域の主な歴史文化資源】



サンヨリコヨリ(市指定文化財)

三峰川の右岸と左岸にある2つの天伯社で行われる祭りです。簗竹の七夕飾りを持った子ども達が「さんよりこより」と唱えながら、鬼役の大人の周りをまわった後、一斉に簗竹で鬼を叩きます。美簗川手天伯社で行った後、祭神は神輿に担がれ、三峰川を渡り、富県桜井の天伯社でも同様の「サンヨリコヨリ」が行われます。洪水などの災厄を防ぎ、豊作や集落の安全を祈る意味が込められていると伝えられます。



六道^{ろくどう}の堤^{つつみ}と桜



六道原を開田するために、江戸時代に高遠藩の直営工事として築かれた堤(貯水池)です。高遠町長藤の藤沢川から水を引くため、約10kmもの水路を建設し、嘉永4年(1851年)に完成しました。現在は桜の名所にもなっています。



みすず
美簀小学校資料館と館内に展示された簀竹細工



美簀地域の人々が運営管理費を出し、保存活用している美簀小学校の資料館です。地域の歴史や文化に関わる展示があり、笠原紙や簀竹細工などの展示があります。運営委員の方々のサポートで美簀小学校の児童たちが様々な体験活動をしています。



ありつかじょう どるい
蟻塚城 本丸の土塁(市指定文化財)

笠原氏の居城と伝えられる蟻塚城は、戦国時代まで使われた山城です。ひな壇式に7段の曲輪が連続し、最上段にある本丸は、1,500 m²の広さで、東側には高さ約5 mの土塁が遺っています。



あしざわてんまんぐうほんでん
芦沢天満宮本殿(市指定文化財)

江戸時代の貞享年間から元禄年間(1684 年～1704 年)に建築された本殿は、柿葺きの一間社流造で、梅をモチーフとした彫刻や、全体に彩色が見られます。

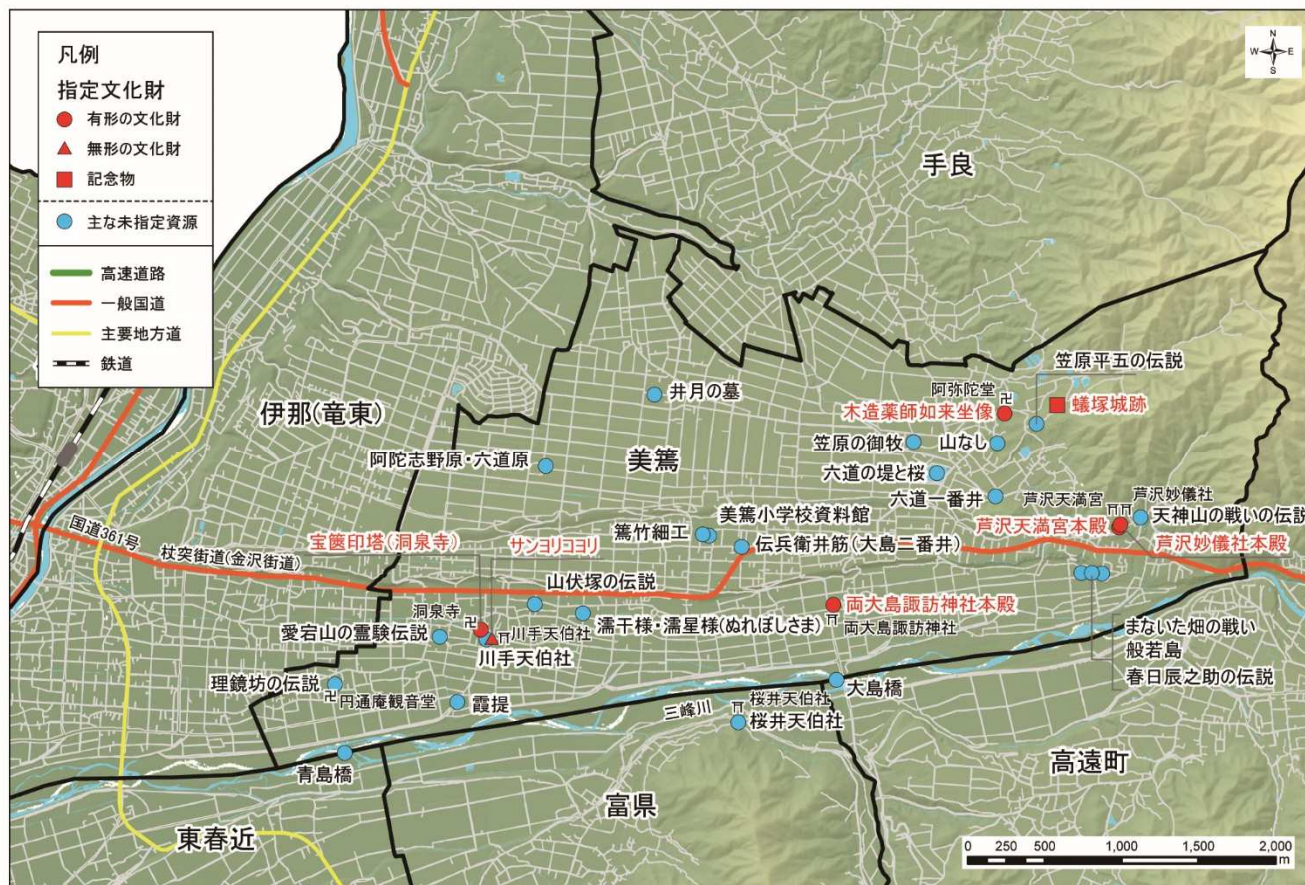


図. 美簀地域の主な歴史文化資源の位置

(5) 手良地域

手良地域は、不動峰など東に連なる山々の山麓に集落が形成されており、里山資源が多く、湧水が豊富な地域でした。野口遺跡では、縄文時代晩期の再葬墓が見つかり、古くから人々の生活が営まれていたことが分かっています。

地域の拠り所となる寺社も多く、十一面千手観音を本尊とする清水庵や江戸の有力力士、雷電為右衛門らが奉納相撲を行った若宮八幡社などがあります。江戸時代末期に建てられた野口八幡神社舞台は大規模な農村舞台で、かつて祭礼の際には、ここで地芝居などが行われていました。豊富な山林資源を背景に、豊かな暮らしがあったことが分かります。

江戸時代、この地域は幕府領でしたが、隣の高遠藩領の藤澤や長藤の谷とは山を越えて盛んに行き来がありました。今でこそ街道筋から最も遠いと感じられる蟹沢集落も、藤澤や長藤の谷へ向かう峠道の入口にあたり、好立地の集落でした。高遠藩領内だけでなく、手良地域内にも多くの石工がおり、こ

うした山道などを利用して全国各地へ旅稼ぎに出掛けていました。蟹沢の四国八十八か所霊場巡拝塔や百体庚申塔など、村人たちの信仰と結びついた石造文化財が数多く遺されていることもこの地域の特徴で、農村の古いたたずまいの中に、石仏のある風景が見られます。



【手良地域の主な歴史文化資源】



とみやうすい
鳥の宮湧水

手良野口の中組にあるこの湧水は、かつては地域の生活用水として使われ、手良小学校の水道としても使われていました。弱酸性で適度にミネラルを含み、まろやかで美味しいと、今でも水を汲みに来る人が絶えません。



きよみずあん
清水庵

かつては大福山養泰寺といい、現在より南の笠原小清水にあったと伝えられます。本尊の十一面千手観世音菩薩は、京都清水寺、播磨清水寺の本尊と同一の木から彫刻したものと伝わります。



わかみやはちまんしゃ
若宮八幡社

中坪集落のほぼ中心にある神社です。文化9年(1812年)9月に、当時の大関、雷電為右衛門や柏戸宗五郎ら総勢75名が訪れ、境内で勧進相撲を行ったと伝えられます。当時の番付額や相撲軍配などが大切に保管されています。



のぐちはちまんじんじゃぶたい
野口八幡神社舞台(市指定文化財)

江戸時代末期の建築で間口14.6m、奥行7.9m、左右に太夫座と下座がついています。市内最大規模で、長野県内でも代表的な舞台です。



しこくはちじゅうはちかしょいじょうじゆんぱいとう
四国八十八か所霊場巡拝塔

蟹沢にあるこの巡拝塔は、四国の八十八か所霊場から持ち帰った石を埋め、その上に各札所の本尊を刻んだ石仏を建てたものです。江戸時代末期に、野口や中坪、上牧、高遠など近隣の人々によって造られ、長い間信仰の対象となってきた場所です。



ひゃくたいこうしんとう
百体庚申塔

江戸時代中期の明和8年(1771年)のものをはじめ、約100体の庚申塔が並びます。上牧、野底、黒沢、木下など近隣の村々からの奉納も見られます。

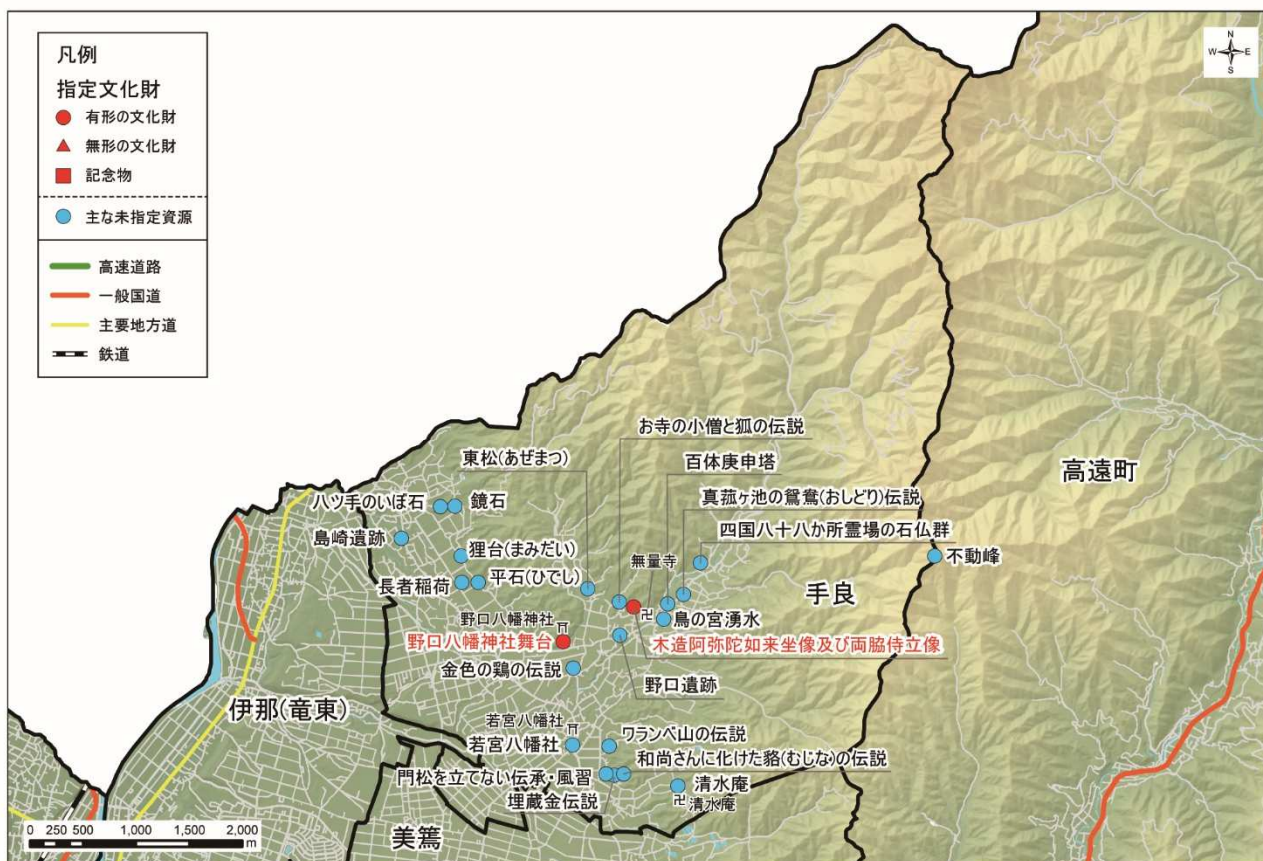


図. 手良地域の主な歴史文化資源の位置

ひがしはるちか

伊那(竜東)地域や美簗地域と同様、治水施設である霞堤や^{きょうづか}経塚など災害伝承をもつ地名が残るほか、江戸時代に天竜川や三峰川で盛んに行われた^{いかだくだ}筏下し(川の流れを利用して材木を運搬する方法)に関わる「^{きがわ}木川」や「^{どば}渡場」といった地名が残っています。

東春近には、段丘下の地域を俯瞰しやすいとい
う段丘地形のメリットをうまく利用した特徴的
な遺跡や歴史文化資源が見られます。5世紀前半頃に造られた老松場古墳群や戦国時代に築かれ
た殿島城は、いずれも段丘端部に存在します。時の為政者が巧みに地形を利用しながら地域を守
り、治めていたことが分かります。近年では昭和33年(1958年)に、段丘崖の高低差を利用して水
力発電を行う春近発電所が建設され、私たちの生活を支えています。



A photograph of a stone monument with the characters '聯峰地蔵' (Ryūhō Jizō) inscribed on it, situated in a park-like setting with trees and a building in the background.

とのしまじょうし
殿島城址

田原薬師庵にある観音菩薩で、江戸時代に下殿島土蔵出身の石工、小笠原政平が造ったものとされます。頬骨が出ていて柔和な顔立ちが、政平の特徴をうかがわせる作品です。



せきぞうじゅんていかなのん ぼ さつ
石造 准 胝観音菩薩
(市指定文化財)

88



せきごうそうたいどう そ じん
石造双体道祖神(市指定文化財)

下殿島土蔵にあるこの道祖神は、江戸時代の天保9年(1838年)に、地元の石工、小笠原政平によって造られました。男神に肩を抱かれた女神が、酒器を持って酒を注ぐ、祝言の場面が刻まれています。



はるちかしやはいでん おおいでん
春近社拝殿と覆殿

創立当時は諏訪社、御射山明神、江戸時代には五社宮などといいましたが、明治43年(1910年)に上・中・下殿島各集落の社を合併して、春近神社となりました。拝殿後ろの覆殿内にある本殿は、宝暦10年(1760年)の建築で、市の有形文化財に指定されています。



はるちかしやほんでん
春近社本殿(市指定文化財)



みやのうえこふんぐん じゅうさんづか
宮ノ上古墳群と十三塚

東春近地域の段丘の端には、非常に良い状態で遺る古墳群が複数あります。また、古墳の分布調査の際、中世の塚である十三塚が70基以上も発見されました。宮ノ上古墳群では、古墳群の前に、十三塚が一行に並ぶ様子が見られます。



はるちかはつでんしよ
春近発電所

三峰川総合開発事業の一環として建設された発電所で、昭和33年(1958年)に運転が開始されました。県営としては最大の発電所で、高遠ダムから10.6kmをトンネルで導水し、2台の発電機で発電しています。

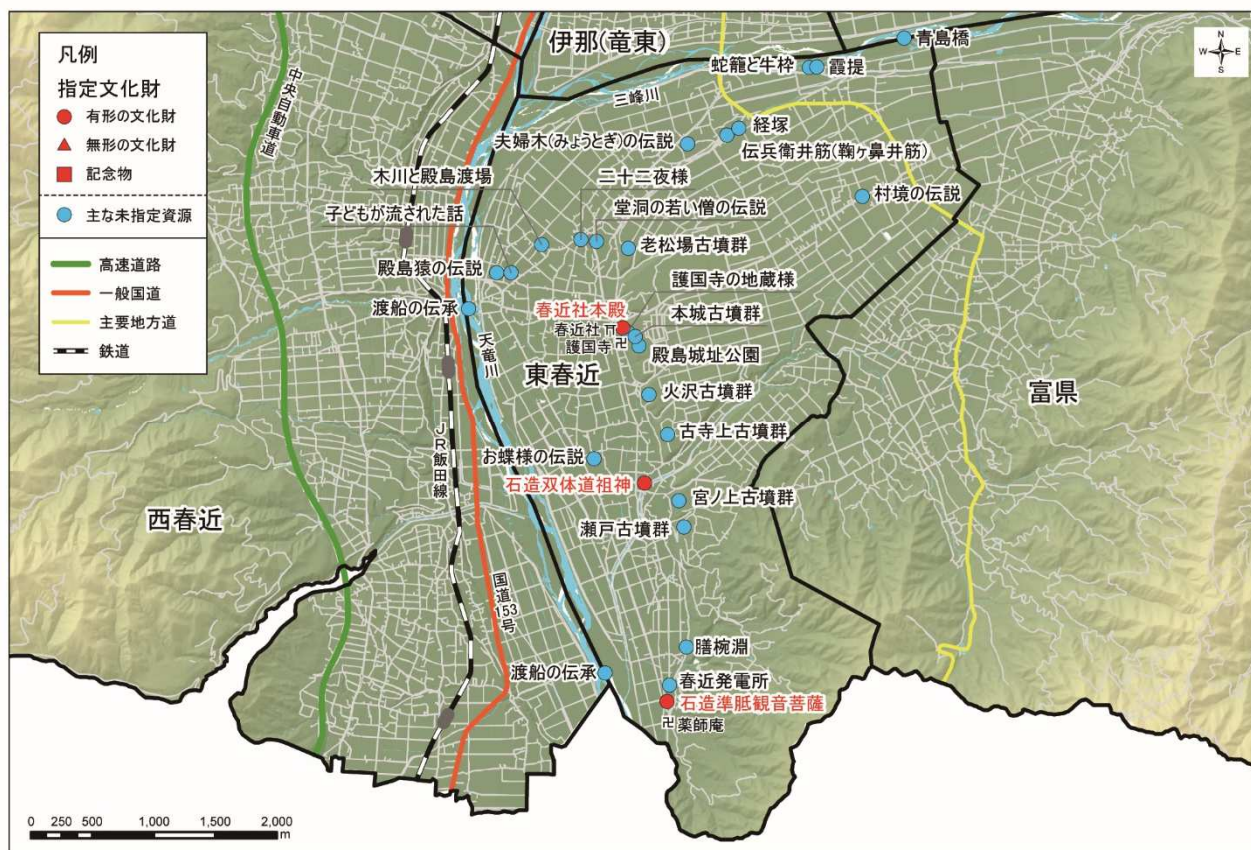


図. 東春近地域の主な歴史文化資源の位置

(7) 西箕輪地域

中央アルプス 経ヶ岳の東山麓に広がる西箕輪地域の中で、最も多くの歴史文化資源がある場所は羽広の仲仙寺周辺です。

仲仙寺は羽広観音とも言われ、平安時代の創建以降、多くの人の信仰を集めてきました。特に「馬の観音様」として知られ、馬の健康と安全を願うため、馬を連れての参詣が盛んでした。境内には数多くの馬の絵馬が奉納されています。坂下の辻から仲仙寺へ向かう「はびろ道」沿いには観音像が刻まれた丁石が立ち、本堂内には鎌倉時代の作と伝わる木造持国天・多聞天立像、山門内には室町時代の木造金剛力士立像(阿形像及び吽形像)があるほか、毎年正月には羽広の獅子舞も奉納されるなど、信仰に関わる様々な歴史文化資源があります。

また、西箕輪は伊那と木曾を結ぶ権兵衛峠の入口にあたる地域です。権兵衛峠は非常に険しい峠で、江戸時代初期までは人の背で荷が運ばれる程度の道だったといわれていますが、元禄9年(1696年)に街道整備が行われた後は、伊那から木曾へ米などの物資が大量に運ばれ、木曾からは特産の曲げ物などが運ばれるようになりました。この道は伊那周辺の村々から木曾助郷(中山道の宿場において労役すること)のために人々が行き来した道でもあり、天竜川対岸の村々からも多くの人が辛い労働に出向いた道です。古くは「おんたけやま」と呼ばれた馬子唄である与地の伊那節や、木曾の馬主が仲仙寺に奉納した千匹絵馬、木曾の奈良井川上流の白川から水を引いた木曾山用水(上戸・中条井)など、木曾との関わりが深い歴史文化資源が多くあるのが、この地域の特徴です。



【西箕輪地域の主な歴史文化資源】



ちゅうせんじ ほんどう
仲仙寺本堂

天台宗の古刹で、信濃三十三観音霊場の札所であり、古くから多くの参詣者を集めました。本堂軒下や近くの考古資料館には、千匹絵馬をはじめ、仲仙寺に奉納された多くの絵馬があります。



吽形像



阿形像

もくぞうこんごうりき しりゅうぞう
木造金剛力士立像(県宝)

仲仙寺仁王門内にあり、阿形像と吽形像と対になります。室町時代の文亀元年(1501年)に京都七条仏所の仏師大蔵卿康忠が造立したと伝わります。ヒノキ材の寄木造りで、高さは255cmあり、今も彩色が遺っています。



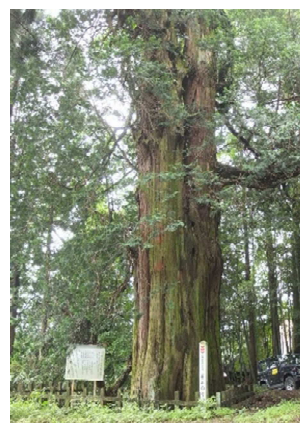
はびろ ししまい
羽広の獅子舞
(市指定文化財)

江戸時代初期に仲仙寺の本堂(観音堂)の再興を祝って始められたと伝わり、寺の狛犬であるともいわれます。毎年1月15日前後に行われ、雄と雌2体の獅子が5つの舞(阿吽の舞)を舞い合わせます。



でえもんじ

道祖神の祭りと一緒にあった小正月の祭りで、願掛けの言葉や道祖神と書かれた文字、厄払いのための色紙袋などを大きな柱に飾り、1月14日から20日まで集落入口の辻にある道祖神の隣に立てます。



まえひら
前平のサワラ
(県指定天然記念物)

吹上神社の御神木で樹齢1000年とも言われる巨木です。サワラの巨木は珍しく、樹高20m、目通り周7.5m、枝下6mで、下から上まであまり太さが変わらないサワラ特有の樹形をしています。

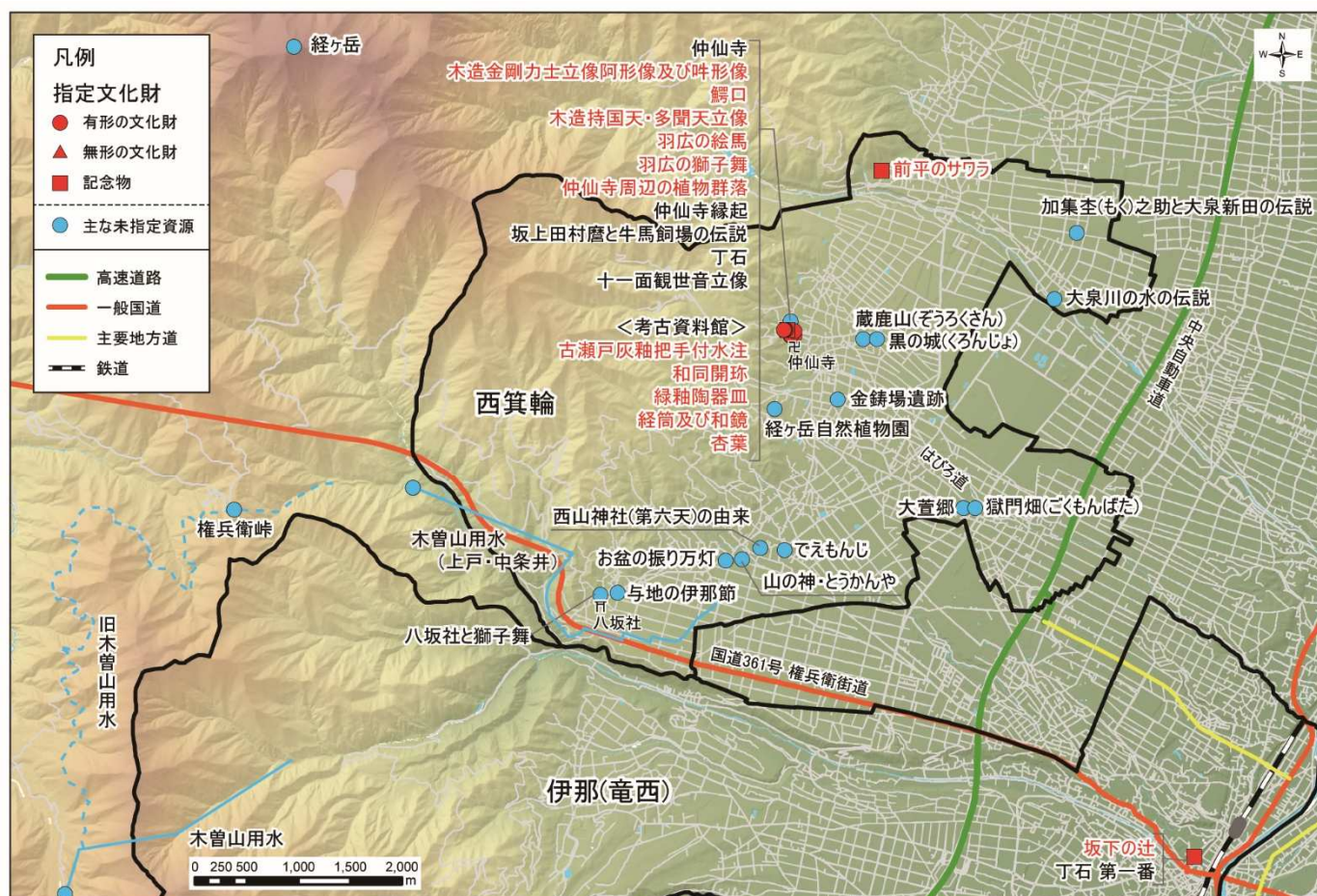


図. 西箕輪地域の主な歴史文化資源の位置

(8) ^{にしはるちか}西春近地域

西春近地域は天竜川の西に位置し、北側は小黒川を隔てて伊那(竜西)地域に接しています。南北に鉄道や複数の街道が通る地域で、これらの交通軸を元に発展した地域です。段丘上には江戸時代の伊那街道や春日街道、段丘下の天竜川沿いには明治時代に伊那街道の改修により付け替えられた三州街道が通っています。

段丘の上段には鎌倉時代から戦国時代頃まで活躍した小井亘氏の本拠地があったといわれ、小出城や大房丸伝説など小井亘氏に関わる歴史文化資源が複数見られます。また、同じ頃から行われていると伝えられる諏訪形の諏訪神社の御柱祭は、寅と申の年に御柱の里引や騎馬行列、建御柱などが行われています。

地域の西側には中央アルプスの前山の権現山があり、山麓には野田山アヤマ園や、大量の刈藪や茅がとれた「百駄刈」という地名が残るほど自然豊かな地域ですが、豊富な里山資源と引き換えに、江戸時代から野生鳥獣の被害に苦しめられた地域でもありました。農地を守るため、延長約6kmもの猪垣が元禄時代以前から造られてきたといい、現在もその一部が諏訪形に復元されています。他にも樹齢300年以上といわれる白沢のクリなど、自然と人の関わりを知ることができる歴史文化資源が遺されています。



【西春近地域の主な歴史文化資源】



こいでじょうあと
小出城跡(市指定文化財)

天竜川右岸の第一河岸段丘上にあり、空堀で隔てられた複数の曲輪や土塁が遺されています。城域は東西 500m、南北 300mにおよび、一説には小井亘氏惣領家の居館跡と伝えられます。



はくさんしゃおおいでん
白山社覆殿



はくさんしゃほんでん
白山社本殿(市指定文化財)

白山社は治承2年(1178年)の創立と伝えられます。覆殿内にある本殿は、市の有形文化財に指定されています。江戸時代の文久3年(1863年)に立川和四郎富重によって建てられたもので、立派な彫刻が施されています。



こいす わ じんじゃはいでん おおいでん
小出諏訪神社拝殿と 覆 殿



こいす わ じんじゃほんでん
小出諏訪神社本殿 (市指定文化財)



す わ がた おんばしらさい
諏訪形の御柱祭 (市指定文化財)

創立年代は不明ですが、鎌倉時代初期には小井亘工藤氏によって祭祀が行われていました。拝殿後ろの覆殿内にある本殿は、江戸時代に諏訪の宮大工、立川和四郎富昌が手掛けたもので、技巧的に優れているとして、市の有形文化財に指定されています。

諏訪形の諏訪神社では、寅と申の年に御柱祭が行われます。5月から10月にかけて、御柱の見立て、斧入れ、縄ない、山出し、里曳き、建御柱が行われ、建御柱の日に奉納される騎馬行列と合わせて、市の無形民俗文化財に指定されています。



す わ がた ししがきあと
諏訪形の猪垣跡 (市指定文化財)

江戸時代以前に、イノシシから農作物を守るために築かれたものです。現在は当時の記録を元に、一部分の約40mが復元されており、高さ1.5mの盛り土の上から、木杭を打ち込んでいます。



しらさわ
白沢のクリ (県指定天然記念物)

樹齢300年以上と言われ、樹高11m、胸高周囲は5.5mを超えます。ヒガンクリという早生種で、植樹されたものと伝わります。



図. 西春近地域の主な歴史文化資源の位置

高遠町地域は長谷地域とともに、伊那市の東部に位置し、総面積の85%を山林が占める山間の地域です。中央構造線に沿うように南北方向に2つの谷があり、藤沢川沿いの藤澤や長藤の谷には杖突街道^{つねつきかいどう}(金沢街道)、山室川沿いの三義^{やまむろがわ}の谷には法華道^{みよし ほっけみち}が通っています。これらの街道に面して集落が形成されているほか、三峰川左岸の段丘上にもまとまった集落が形成されています。

戦国時代から江戸時代末まで続いた高遠城を中心に栄えたのが、現在の西高遠、東高遠の両地区で、城下町という特殊性から、歴史文化資源が集中している

江戸時代の高遠周辺には石材加工をする職人が多く、彼らは「高遠石工」と呼ばれていました。高遠藩の政策として出稼ぎが奨励されたこともあり、多くの石工が全国各地に出向き、優れた石造物を遺しました。地域内には彼らの高い技量を感じることができる石造物が数多く遺されています。

高遠は山間の城下町であるとともに、桜のまちでもあります。明治時代以降、高遠城跡に植えられたタカトオコヒガンザクラは1,500本を数え「天下第一の桜」として全国的に有名になりました。街道や城下町、高遠石工、桜をはじめ、高遠城の存在があったからこそ花開いた文化が多く、高遠城を中心として、過去から現在まで様々な歴史が紡がれてきた地域です。



三峰川と藤沢川の合流点に近い河岸段丘上に造られた平山城です。築城時期は不明ですが、戦国時代の天文 16 年(1547 年)に武田信玄が修築したと言われています。江戸時代には保科氏、鳥居氏、内藤氏の 3 大名が城主となりましたが、明治 5 年(1872 年)に廃城となり、建物は取り壊されました。現在も当時の曲輪配置がよく残り、土塁や大きな堀からは近世城郭の姿が見てとれます。



高遠城下の南側の入口、相生町にあります。枡形とは、外敵が一気に侵入することを防ぐために設けられた施設で、江戸時代の文久3年(1863 年)に、城下町が拡張された際に設けられました。当時は道路を挟んで南北約 20m、東西約 13.6mの空間でしたが、現在は北側の一部と石垣が潰れています。



きゅうなかむら け じゅうたく
旧 中村家 住宅

高遠城下町の入口にほど近い、諸町にある大規模な町家建築です。2階が低く、屋根と1階の庇の間が狭いといった町家の特徴がよく表れています。江戸時代前期から中期、享保9年(1724年)以前の建築とみられ、高遠城下町に建つ町家の中で最も古い建物です。



ご せいぞう
五聖像 (市指定文化財)

儒学の祖、孔子とその教えを受け継いだ孟子、曾子、顔子、子思の姿を刻んだ木造の五聖像は、江戸時代末期に藩校進徳館内の聖廟に祀られました。高遠藩領内の村人たちが、献上したものです。



い さわしゅう じ せんせい せい か
伊澤 修 二先生の生家 (市指定文化財)

東京師範学校や東京音楽学校(現在の東京藝術大学)の校長を務め、教科書の編さんや発行に尽力するなど、近代の新たな教育の仕組を整えた伊澤修二は、高遠藩士の子として、東高遠で生まれ育ちました。下級士族の住宅としても貴重な遺構です。



なかまち やたい
仲町屋台 (市指定文化財)

諏訪の名工、立川氏による豪華な彫刻に彩られたこの屋台は、文政5年(1822年)に造られたものです。鉾持神社の祭礼に合わせて、高遠ばやしとともに町内を巡行しました。屋台の2階では、手踊り狂言が行われ、賑やかであったと伝えられます。



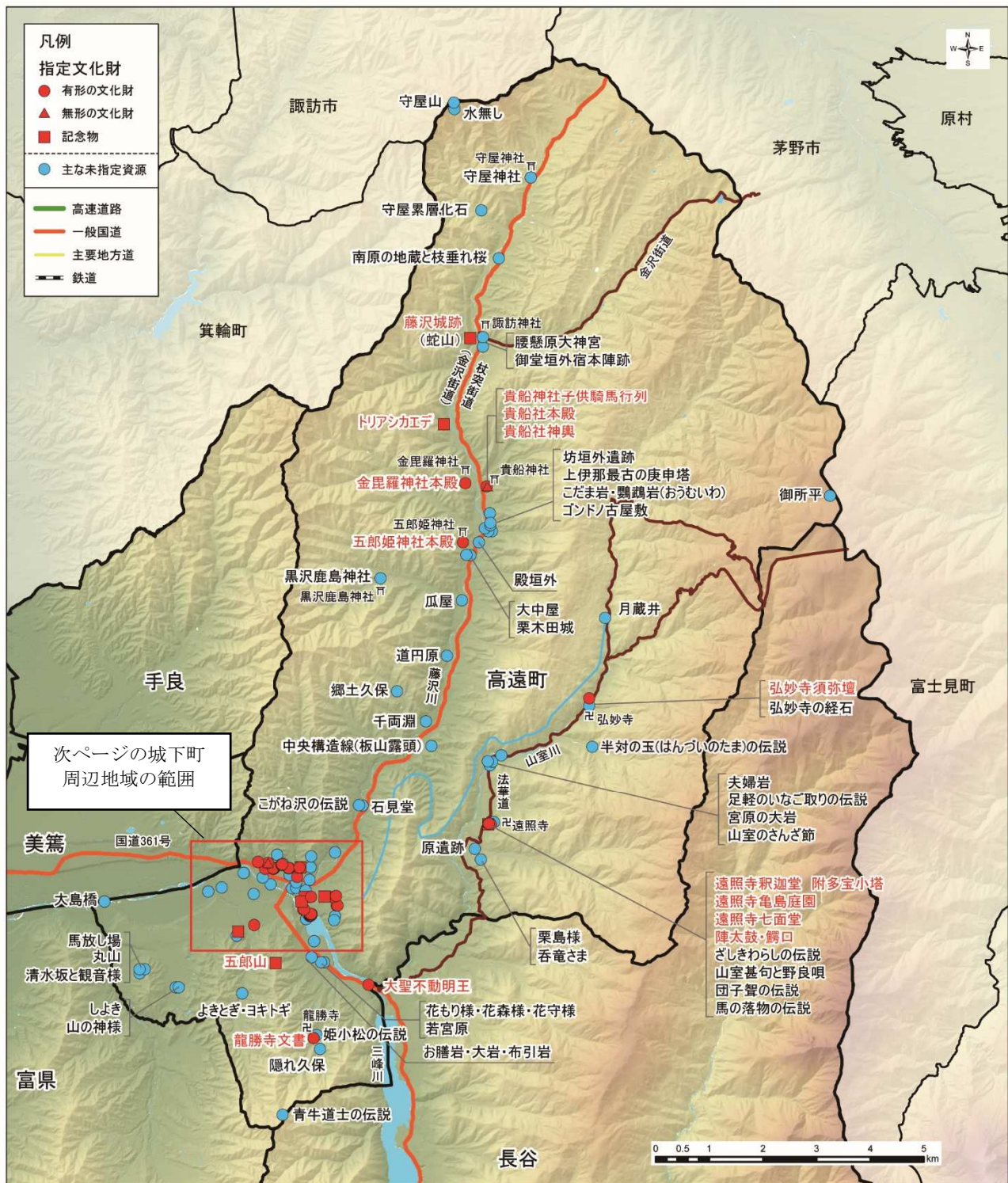
けんぶく じ せきぶつぐん
建福寺石仏群 (市指定文化財)

守屋貞治は高遠石工の中でも稀代の名工と呼ばれた人物です。全国各地に数多くの石仏を遺していますが、最も多くの貞治仏を拝むことができるのが建福寺です。



え しま はか
絵島の墓 (市指定文化財)

江戸時代中期、江戸城大奥で7代将軍徳川家継の生母に仕えた絵島は、墓参の帰りに芝居見物をし、門限を遅れたことを罪に問われ、高遠藩へお預けとなりました。28年間囲み屋敷で過ごし、61歳で亡くなると日蓮宗の蓮華寺へ葬られました。



みどがいとじゆくほんじん
御堂垣外宿本陣

御堂垣外宿は杖突街道と金沢街道の分岐点に位置する宿場で、本陣には高遠藩主や飯田藩主、旗本らが休泊しました。当時の座敷や資料などが現在も大切に伝えられています。



じんたいこ わにぐち
陣太鼓・鰐口(市指定文化財)

遠照寺に伝わる陣太鼓と鰐口は、戦国時代に織田軍が、高遠城を攻めるために進軍した際に道中の寺社から奪い、打ち鳴らしてきたものです。戦に勝利した後にこの寺へ奉納されました。

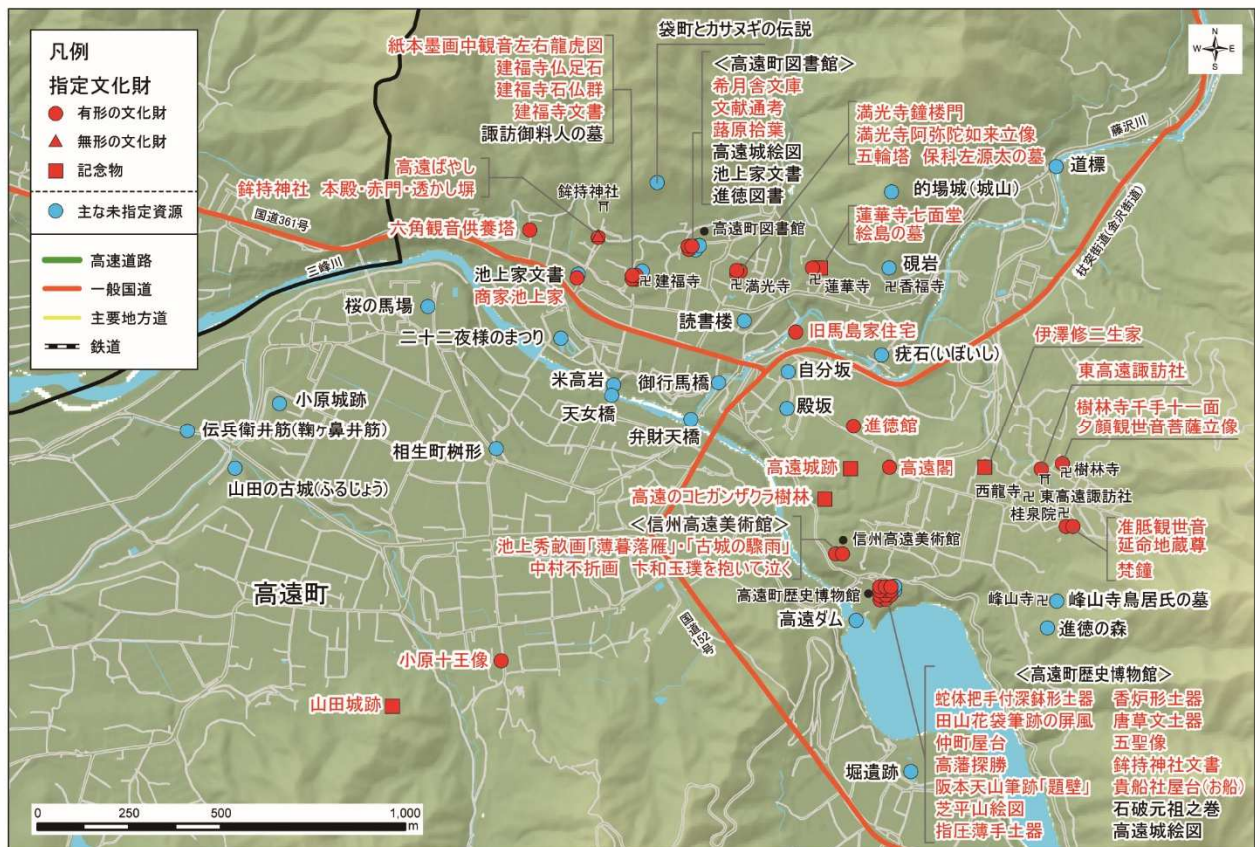


図. 城下町周辺地域の主な歴史文化資源の位置



しほんぼく がちゅうかんのん さゆうりゅう こず
紙本墨画 中 観音左右 竜 虎図
(国指定重要文化財)

建福寺所蔵の三幅対のこの墨画は、安土桃山時代から江戸時代初期に活躍した絵師、狩野興以によるものです。中央には慈愛に満ちた白衣観音、左右には勇猛な竜と虎を描いており、静動が調和した見ごたえのある作品です。



ふきはらしゅうよう
路原拾葉
(市指定文化財)

高遠藩に仕えた儒学者、中村元恒と元起父子が編さんした150巻に及ぶ書籍で、地域の歴史や伝承など様々なことがらをまとめた郷土文献の集大成です。



なかむら ふせつ
中村不折筆
「カ和璞を抱いて泣く」
(市指定文化財)

高遠ゆかりの画家で書家の中村不折が、中国の故事を題材にして、大正3年(1914年)に描いた作品です。不折が高遠町に寄付したものです。



じゅりんじ
樹林寺
せんじゅじゅういちめんくわんぜおんぼさつりゅうどう
千手十一面夕顔観世音菩薩立像
(市指定文化財)

江戸時代初期の高遠城主、保科家の祈願所となった樹林寺の本尊で、保科氏から厚く信仰されました。下総国多胡(現在の千葉県多古町)の樹林寺の本尊を写して造られたと伝えられます。

(10) 長谷地域

南アルプスの雄大な山々の麓に位置する長谷地域は、総面積の 96%を森林と原野が占めており、山抜きには語れない地域です。地域内に遺る歴史文化資源を通して、地球の歴史と山に生きた人々の暮らしの両方を知ることができます。

戸台^{とだい}地籍から産出するアンモナイトや南アルプス周辺で多く見られる石灰岩は、この地域がかつて海の底であったことを示しており、長い間の地殻変動^{ちかくへんどう}で隆起^{りゅうき}した土地であることが分かります。石灰岩地帯特有の希少植物が見られるなど、自然資源が多い地域です。

地域内には、大断層である中央構造線が南北に走っており、断層に沿って深いV字谷が形成されています。人々は断層東側の緩やかな斜面^{ゆるかな}に集落を構え暮らしてきました。また、谷地形を利用して街道が発達し、古くは南北朝時代の宗良親王^{むねよし}や、江戸時代には火伏の神^{ひふせのかみ}である秋葉神社^{あきはじんじや}へ向かう参詣者らが往来しました。街道を通る人々が伝えた「ざんざ節」や、「きんにょによ」または「キンニョンニョ」は江戸時代の流行歌で、今も民謡^{みんよう}として歌い踊り継がれています。このように長谷地域では中央構造線地帯特有の地形の上に、人々の暮らしと文化が成り立っています。

南アルプス山麓の深い森は、その6割が国有林です。古くから杣^{そま}や木挽^{こびき}、木地師^{きじし}、猟師、炭焼きをはじめ、様々な人が山に入り、その資源を利用して生活していました。特に盛んだったのは林業で、戦前には森林鉄道も整備され、長谷の山から切り出した多くの材木や木炭が全国へ出荷されていきました。こうした山の恵みが地域の経済を支え、熱田神社や中尾歌舞伎^{なかのおかぶき}など有形無形の文化財を育みました。昭和 34 年(1959 年)、昭和 36 年(1961 年)と度重なる災害によって山間部は大きな被害にあった上、時代の変化もあり、山と人との関わり方は大きく変化しましたが、地域に遺る歴史文化資源を通して、失われゆく豊かな山の暮らしを知ることができます。



【長谷地域の主な歴史文化資源】



中央構造線が造った地形
ひじ 非持集落全景(昭和 22 年(1947 年))

美和ダム建設前、昭和 22 年(1947 年)の非持集落全景です(北から南を向いて撮影、向かって右側が西)。中央構造線の影響により形成された谷の様子がよく分かります。



みやま 御山の遺跡(市指定文化財)

溝口の常福寺境内の北にある「みやま」と呼ばれる小山の上に、後醍醐天皇の皇子、宗良親王の墓と伝えられる遺跡があります。宗良親王の子、尹良(ゆきよし)親王が建てたものと伝えられます。



う つ ぎ さいごくさんじゅうさんかんのん
宇津木西国三十三観音(市指定文化財)

高遠町建福寺の心願により、入野谷郷に住む百数十人の寄進で建立されました。池上休柳が下絵を描き、岡村菊菱が巡礼歌を書いた上で、渋谷藤兵衛が石に彫刻し、弘化2年(1845年)に開眼しました。



い な えいりんしょうとだいじぎょうしょう
伊那営林署戸台事業所
(昭和14年(1939年))

かつて山中には営林署の現地事務所、作業用の飯場などが建てられ、多くの人々が生活していました。

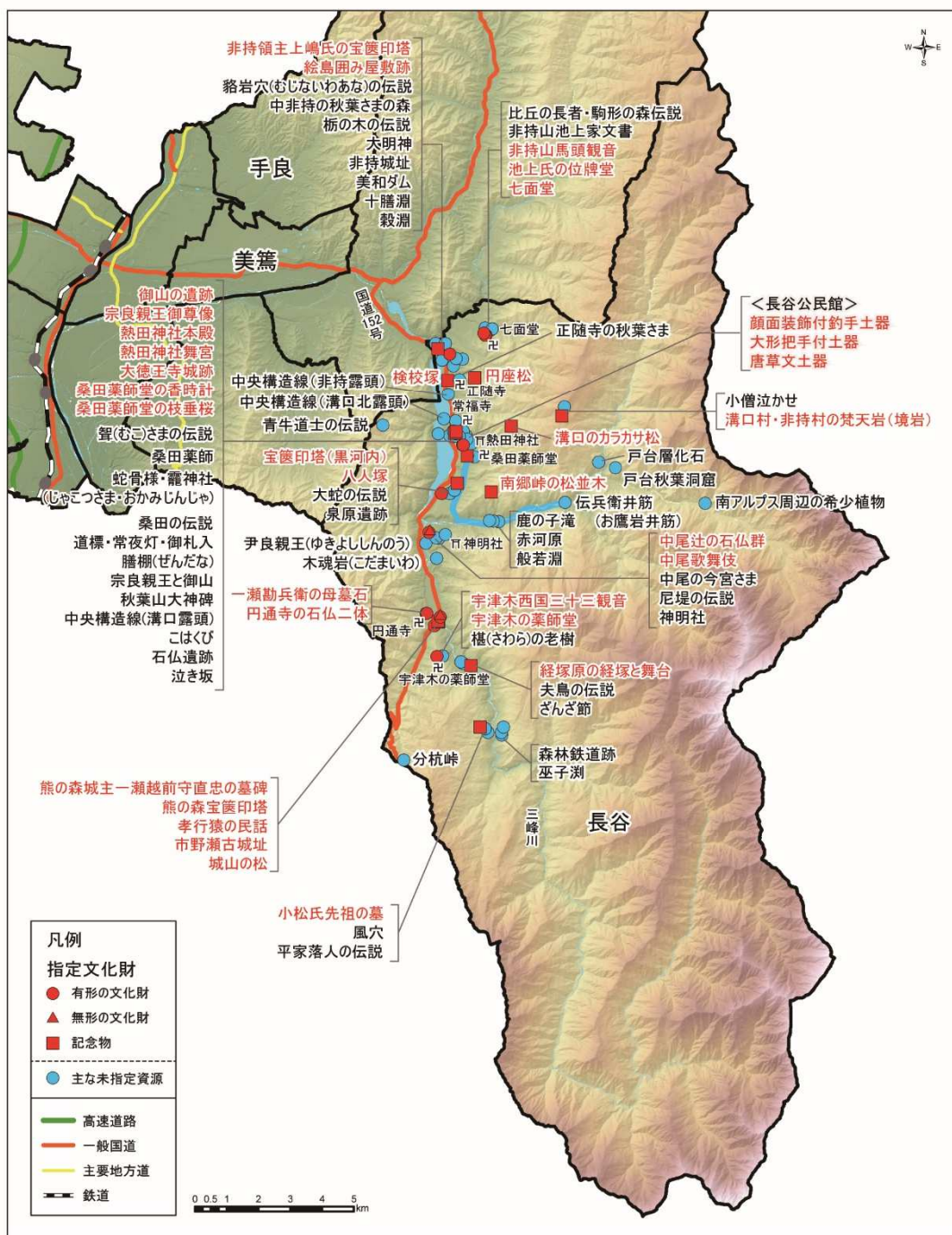


図. 長野地域の主な歴史文化資源の位置

3 伊那市の歴史文化の特性

それぞれの地域を概観^{がいかん}した上で、伊那市内の歴史文化を振り返ると、大きく分けて、「山」、「川」、「みち」の3つのキーワードで捉^{とら}えることができます。それぞれに関わる概要は以下のとおりです。

(1) 「山 ―2つのアルプスと豊かな里山が育んだ歴史文化―」

私たちの身近には、常に山があります。日々見上げる3,000m級の山々は、高山特有の動植物や、特異な地質に適応した植物を育みました。麓^{ふもと}の人々は、豊かな山の恵みを利用して生活を営み、山とは切っても切れない暮らしが連綿^{れんめん}と続いてきました。

① 山岳地域の歴史文化

市域の東西には、南アルプス、中央アルプスという3,000m級の山々が連なる山岳地域があります。

高い山への崇敬^{すうけい}の念は山岳信仰を生み、東駒ヶ岳や西駒ヶ岳、経ヶ岳などへ向かう登山道や山頂には、人々の信仰心を示す石碑や石仏が数多く祀られています。新たな登山道が次々と開かれた近代以降、山岳地域を訪れる人も増え、西駒山荘石室^{にしこまさんそうしむろ}といった山小屋が整備されるなど、山岳地域ならではの歴史文化が育まれました。

また、南アルプスには、世界的な生息域の南限に生息するライチョウや、石灰岩地帯に生育するシナノコザクラなど、高山特有の厳しい環境を生き抜いてきた地域特有の生物資源があります。周辺には、戸台のアンモナイトや中央構造線の露頭といった地球の歴史や大地の成り立ちを知ることができる自然資源もあり、近年はこれらの資源を活かした地域づくりが行われています。

② 山間地域の歴史文化

山岳地域の麓には深い森があり、その森林資源を利用した人々の暮らしや産業がありました。かつては木材の伐り出し、焼畑でのそば耕作、炭焼き、狩猟、木地碗^{きじわん}づくりなどが盛んに行われており、山中や山間の地域には多くの人が暮らしていました。「生活に困ったら、金を借りるより山へ行け」という言葉が伝わるほど、山の恵みは豊かな暮らしをもたらし、豪華な彫刻に彩られた熱田神社本殿や中尾歌舞伎など、山林資源に恵まれた地域だからこそ生まれ、現在まで守り伝えられた歴史文化があります。

また、里山は「入会地^{いりあいち}」として人々の生活を支えた場所で、入会権を確認する「芝平山絵図干し行事^{しびらやま}」が現在に至るまで続けられるほど、大切な場所でした。

急激な社会変化により失われてしまった山村文化も多くありますが、伝統芸能や地名、遺構、食文化など、今に伝えられているものもあります。

(2) 「川 ―水量豊富な暴れ川が生み出した天竜川上流域の歴史文化―」

市域の山々から流れ出た水は、天竜川に注ぎます。私たちの暮らしは、標高差2,000m以上を一気に流れ下る支流河川と、天竜川が造った土地の上で営まれてきました。伊那市には、川が生み出した天竜川上流域ならではの歴史文化が見られます。

① 天竜川と三峰川に関わる歴史文化

市域には南北に天竜川、東西に三峰川という一級河川が流れており、この2つの河川は流域の暮らしに大きな影響を与えてきました。水の力を利用した水運が行われ、上流から供給される養分などが周辺の農地に恵みをもたらした半面、大規模な水害を引き起こすことも度々ありました。流域に暮らす人々が長年にわたり川と向きあってきた歴史とその思いが、災害伝承やサンヨリコヨリといった水難厄除けの行事、復旧復興に際した知恵など様々な文化を生み、現在に受け継がれています。

② 河岸段丘によって育まれた歴史文化

天竜川や三峰川とそれらの支流沿いには、断層と侵食の影響により、長い時間をかけて河岸段丘が形成されました。悠久の歴史の中で誕生した河岸段丘の景観は、伊那市の景観の特徴の1つでもあります。河岸段丘は階段状の地形であるため、段丘崖によって土地が隔てられます。隣り合う地域であっても段丘の上下では異なる歴史文化が育まれてきた一方で、離れた地域であっても似通った立地のところでは歴史文化に共通点が見られます。

段丘下の河川流域は、川の影響を受けやすく氾濫原となったため、災害伝承や治水文化が伝えられています。段丘上段では平坦地が広がる半面、水を得にくいことから、利水に関わる用水や堤(貯水池)が発達しました。段丘端部では、崖下の地域や河川を一望できるため、かつての支配者が築いた古墳群や城館跡が多く遺ります。

各地に遺る歴史文化資源からは、地形の利点をうまく使い、難点を克服しながら生きてきた人々の姿が浮かび上がります。

(3) 「みち ー伊那谷を交差する街道が織りなす歴史文化ー」

市域には幾筋もの街道や生活道があり、道沿いには往来者のために造られたものや、遠隔地から伝えられた芸能文化が遺ります。複数の街道が交差し、人や物が集中する場所には「町」が形成され、人や物の交流により多様な歴史文化が生まれました。

① 街道をめぐる多様な歴史文化

古くは東山道をはじめ、市域には複数の街道が東西南北に走り、様々な人が行き交いました。市域のほぼ中央を南北に走る「伊那街道(三州街道)」、竜西地域を東西に走る「はびろ道」や「権兵衛街道」、竜東地域から美簗地域を通り、高遠から諏訪、茅野方面へ抜ける「杖突街道」や「金沢街道」、長谷・高遠の中央構造線の谷を通る「秋葉街道」、「法華道」などがあります。これらの街道沿いには、行き交う人々のために整備された宿場、道標、石仏などが遺ります。また、荒神遺跡出土の遠賀川系土器が示す弥生文化をはじめ、日蓮宗の信仰、江戸時代の高遠ばやしや中尾歌舞伎のように、街道を通じて他地域からもたらされ、当地に根付いた文化もあります。当地で磨かれた技術を他地域へ伝えた高遠石工の活動なども、街道に関わる歴史文化であり、時代や内容も様々な歴史文化資源が組み合わさり、伊那市の歴史文化が成り立っています。

② 生活の道に関わる歴史文化

大きな街道以外にも、集落から田畑へ向かう道、年貢を納めるために役所へ向かう道など、人々が日々の暮らしの中で利用していた道があります。例えば入会地や御林などへ行く山道は、

現在は利用者が減り、失われつつある道の1つですが、山道の途中に祀られた「山の神」など、人々が遺したものを通して、かつての暮らしを感じることができます。

③ まちの発展とともに花開いた歴史文化

古くは門前町として発達した高遠は、戦国時代以降、高遠城の城下町として発展しました。江戸時代の城下町は宿場機能も兼ねており、多くの人や物、新たな文化が集まる地域経済の中心地でした。

明治初期、現在の長野県域における初の公園として、高遠城跡に誕生した高遠公園も、まちの発展と関わっており、人々が集い「群衆遊観ノ場所」となりえる社会的環境が整っていたことを示しています。公園に植えられたタカトオコヒガンザクラは多くの人に愛され、やがて「天下第一の桜」と呼ばれるほど美しい景観を生みました。市内各地にある他の桜の景観も含めて、地域に親しまれ大切にされています。明治時代になり、新たな交通手段が用いられるにつれて、人や物の流れが変わり、市街地は高遠町から伊那町へと移っていきました。現在の伊那市街地には、伊那町の時代を感じさせる近代建築や戦後に建てられた看板建築が遺ります。

江戸時代以前の歴史文化資源が多い高遠町地域、明治時代以降の近代化に関わる歴史文化資源が多い伊那地域、それぞれの「まち」の特徴から、地域社会の変化を感じることができます。